（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　古田富建

古田富建氏の「「韓国的キリスト教」と恨：韓国土着キリスト教の救済論」は、韓国独自の国民的思考と理解されている「恨（はん）」の概念の歴史をたどりつつ、「恨」の概念に関わりをもつ韓国の土着的キリスト教の諸相を照らし出そうとしたものである。

「恨」とはかなわなかった願いに対する残念な思いを指すが、他者への怨みとは区別される。韓国の巫俗では、伝統的に生者・死者の「恨を解く」儀礼が行われる。心に堆積している無念の思いが表出されるが、必ずしもそれですべてはらされるのではない。この「恨」にこそ韓国の国民文化の核があるという言説は、1970年代から形成されるが、抑圧状況下の「悲哀」を強調する言説が提示される一方、カトリック信者だった抵抗詩人金芝河や民衆神学のように解放を目指す社会変革の主体への期待と結びつけられもしたことを古田氏は示している。「恨」概念の構築性について新たな分析枠を提示したものだ。

これまでの研究とは大きく異なる点は、文鮮明が創始した統一教という宗教集団の教義と信仰実践を韓国的な文脈に置いて捉え返し、巫俗等に見られる伝統的な「恨」観念とどう関わっているかを解明していることだ。1950年代から60年代にかけて形成されるこの集団の神学では、「神の恨」や「イエスの恨」が説かれてきた。そこには儒教的な家族観や「解怨思想」（「恨」が解ける未来を待望する）の伝統が影響を及ぼしてもいる。古田氏はまた、統一教の形成に影響を及ぼしたことが知られているキリスト教伝道師、李龍道の信仰思想についても論じている。李龍道は1930年前後に独自の神学を掲げて活動したが、そこでは神やイエスの「悲しさ」や「孤独」が強調されていた。李龍道は次第に巫者的な機能を果たす女性との連携を強めるが、そこにも巫俗的な「恨」の伝統との親近性がうかがわれる。統一教の「恨」はこうした系譜に根ざしたものだった。

ところが、90年代以降、統一教は神やイエスの「恨」の概念とキリスト教色を後退させ、かわりに死者の「恨」を強調するようになる。死者を生者に引き合わせる「先祖解怨式」や死者に救いをもたらす「祝福結婚」を行うというように、巫俗的な「恨解き」の要素を残しつつも儒教的な血統重視の傾向を強めている。韓国プロテスタンティズム式の死者儀礼では原理的に対処しえなかった非信者、とくに先祖の救済を、「恨解き」によって可能にする儀礼でもある。これら興味深い資料を示しながら、古田氏は韓国的な要素を濃厚にもつ「韓国的キリスト教」において「恨」の概念が重要な要素となってきたことを示している。

70年代以降の「恨」言説を相対化して論じている第１章と分析概念として「恨」を用いている２、３章の間の論理的・方法論的関係づけが十分ではなく、「恨」の概念が韓国宗教史においてどのような位置を占めてきたのかについて明確な像が結ばないなどの難点はあるが、「韓国的キリスト教」の解明への貢献は大きい。「恨」概念を通して韓国近代宗教史に新たな光を当てているのも確かだ。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。